

メディア・イベントと温泉 —「国民新聞」主催「全国温泉十六佳選」をめぐる—

関戸明子

群馬大学教育学部社会科教育講座

(平成16年9月22日受理)

Media Events and Spas: Revisiting *Kokumin Newspaper's* “The Best Sixteen Spas in Japan”

Akiko SEKIDO

Faculty of Education, Gunma University

(Accepted September 22, 2004)

はじめに

本稿では、温泉をテーマとして、昭和初期にマスメディアが企画・主催し、その経過を報道したイベントに着目して、このようなイベントがどのような特質をもっていたのかを考察する。具体的には、昭和4年(1929)12月から昭和5年(1930)3月にかけて「国民新聞」が行った「全国温泉十六佳選」というメディア・イベントを取り上げ、先行した「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」主催の「日本新八景」の選定と比較しながら、各地の温泉がどのようにかかわったのかを明らかにしていきたい。

大正期・昭和初期において、温泉をめぐるメディアは大きく変容した。かつては、特定の温泉が自前で案内書を発行していたにすぎなかったが、この時期になると、全国の温泉を網羅したガイドブックが官民双方から出版されるようになった。そのなかでも、鉄道省は、大正9年(1920)以降『温泉案内』の発行・改訂を続け、交通手段の発達にともない掲載する温泉地を増やしていき、利用者の便に応じて、特色や効能の分類に工夫をみせた。鉄道省による『温泉案内』の出版は、温泉を目的地とする観光旅行に対する需要の喚起に大いにかかわった(関戸 2004a)。また、それぞれの温泉においても、温泉組合・旅館組合などが主体になって、新聞への広告、ポスターの掲示、博覧会・展覧会への出品など、メディアを利用した宣伝活動を行い、より広い地域から多くの入浴客を迎えるようになっていた。

内務省の調査によると、昭和5年(1930)における全国の延べ入浴者数は19,931,865人であった(三浦 1931)。これは大正9年(1920)までの10カ年の年間平均入浴者数16,806,911人と比べると

(内務省衛生局 1923)、2割近い増加となっている。当時の温泉地は、「療養の目的の外に近年社会生活が忙しくなるに伴ひまして、平素の煩雑な生活から離れて閑静の地に身を休めることに依つて心身の休養を図り、健康の増進に役立たせようとする目的で、温泉を訪れる人々が非常に多くなつて参りました。静養と申しまして強ち都市の人ばかりでなく、農村の人々も農閑期を利用して温泉場を訪れ、自炊をしながら気晴らしをする者も少なくないのであります。……他方には温泉場を一種の享楽場として利用しようとする人士も次第に殖えてまゐりました」(三浦 1931) という状況にあった。つまり、伝統的な湯治を目的とする療養本位の客だけでなく、静養本位、享楽本位で温泉を利用する者が大きく増加しつつあったのである。

一方、新聞社によるイベントは、明治30年(1897)頃より定着して、東京・大阪の有力紙のみならず、地方紙も競って人気投票や懸賞募集を行い、それが読者獲得のための重要な手段となっていた。また、花火大会・講演会・博覧会・競技大会などの各種イベントを行い、多くの人々を集めて話題づくりをした。さらに部数拡大・広告獲得のため、新聞各社では関東大震災前後から事業活動を拡充し、営業競争を展開していた(有山 1992; 津金澤 1996; 津金澤・有山 1998)。

このような時代背景のなかで、新聞社主催による近代的な消費文化の広告装置としてのメディア・イベントを、温泉地の人々がどのように捉え、利用したのかを明らかにしていくことが、本稿の課題である。

I 「日本新八景」の選定と温泉の得票結果

「国民新聞」主催の「全国温泉十六佳選」に先行して、新聞社が主催し、読者に投票を呼びかけ、その得票結果が公表された大規模なメディア・イベントに「日本新八景」の選定があった。このイベントについては、わが村わが町の名誉と観光振興のため地元による組織的な集票活動があったこと(白幡 1992)、風景のローカリズムを喚起し、郷土そのものをつくりあげる運動であったこと(荒山 2003)が指摘されている。ここでは、「全国温泉十六佳選」との比較のために、「日本新八景」というイベントの概要と、温泉の得票結果についてふれておきたい。

この「日本新八景」は、昭和2年(1927)、「東京日日新聞」と「大阪毎日新聞」の主催、鉄道省の後援で行われたもので、温泉だけでなく、山岳・渓谷・瀑布・湖沼・河川・海岸・平原という8種類の新しい日本の風景地を選定しようとするものであった。

表1 「日本新八景」得票数上位の温泉

| | 八 景 | 十六佳選 |
|--------|-----------|---------|
| 花巻／岩手 | 2,120,488 | 867,862 |
| 熱海／静岡 | 1,038,287 | 256,372 |
| 山中／石川 | 907,862 | 1,014 |
| 和倉／石川 | 740,334 | 3,306 |
| 三朝／鳥取 | 570,358 | 1,838 |
| 芦原／福井 | 556,188 | 3,556 |
| 東山／福島 | 529,344 | 8,429 |
| 片山津／石川 | 516,718 | 1,158 |
| 伊東／静岡 | 507,488 | 10,489 |
| 別府／大分 | 484,697 | 30,942 |
| 嬉野／佐賀 | 416,594 | 1,253 |
| 俵山／山口 | 331,089 | 1,879 |
| 温海／山形 | 322,354 | 219,171 |
| 那須／栃木 | 300,524 | 50,805 |
| 勝浦／和歌山 | 288,016 | |
| 皆生／鳥取 | 284,308 | |

「東京日日新聞」昭和2年(1927)6月10日紙面、「国民新聞」昭和5年(1930)3月6日紙面より作成「十六佳選」では得票500票未満の温泉は省略されている

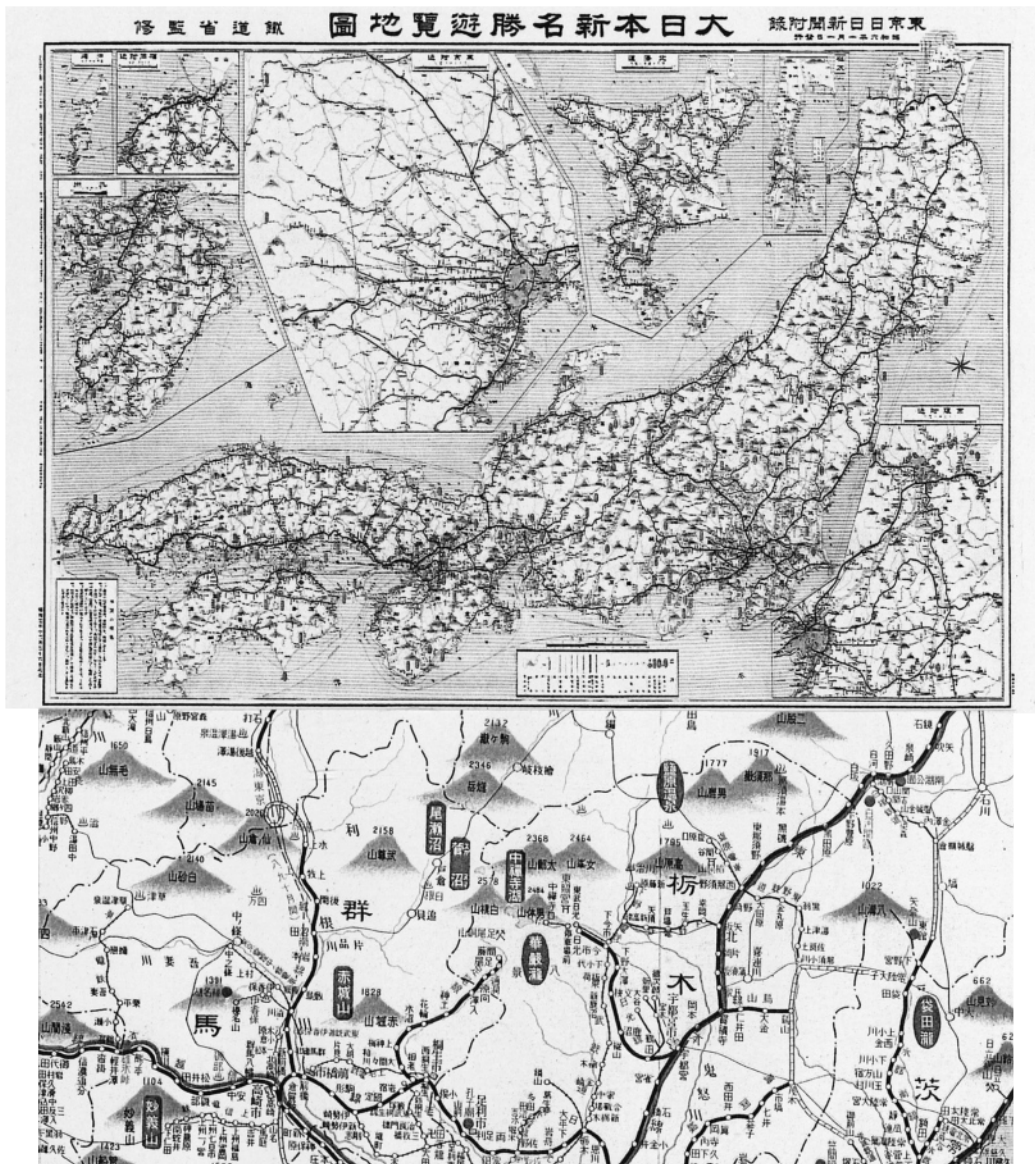


図1 「大日本新名勝遊覽地圖」

上：全体図 下：部分図 「東京日日新聞」昭和6年（1931）1月1日附録

ほかの八景が自然の風景地であるので、ここに温泉が加えられているのはやや異質な感がある。これに対して、「日本新八景」は、風景コンテスト以上に観光地コンテストの色彩が強いかうかがえると指摘されている（白幡 1992）。投票は一景に一枚の官製ハガキを使い、4月10日に始まり、5月20日に締め切られた。

温泉部門の投票総数は、1191万票余で、147カ所がリストアップされた（「東京日日新聞」昭和2年6月10日付）。最多得票は花巻の約212万票で、ここだけで全体の17.8%を集めており、熱海の約104万票、山中の約91万票、和倉の約74万票と続いた（表1）。このイベントにおける組織的な

投票活動が地域に与えた影響は小さくなかったと思われる。しかし、この八景の選定には、得票結果だけでなく、審査委員会による選定基準も加味されて審議され、7月5日に「日本新八景・二十五勝・百景」が発表された。その結果、得票上位の花巻・山中・和倉などは百景に選ばれるにとどまった。温泉の第一勝である八景に選定されたのは、得票数10位、約48万票を集めた別府であった。二十五勝には、熱海・塩原・箱根の三つの温泉が入ったが、このうち塩原は約25万票、箱根はわずか187票という得票であった。

このように「日本新八景」では読者による投票が、そのまま八景の選定にはつながらなかった。そのため、長野県飯田地方では、「東京日日新聞」の購買ボイコット運動に発展した。これは、天竜峡が溪谷の部門で約313万票と1位の得票を集めながら、八景には約61万票の上高地溪谷が選ばれたために生じた。落選した地元の不満を解消するために「八景」のほかに「二十五勝」が設けられ、天竜峡はそれに選ばれたけれども、熱狂的な投票活動のあとだけに人々の憤激は大きかったのである（毎日新聞百年史刊行委員会 1972, p.374）。

図1は、昭和6年（1931）1月1日発行の「東京日日新聞」附録「大日本新名勝遊覧地図」である。この地図は、縦79cm×横109cmとかなり大判で、鉄道省の監修になる詳細な鉄道路線や航路・航空路とともに、昭和2年に選定された「日本新八景・二十五勝・百景」が記入されている。部分図では、八景の華厳の滝、二十五勝の袋田滝・塩原温泉、百景の中禅寺湖・菅沼・尾瀬沼・赤城山・妙義山の位置を知ることができる。元旦の新聞に折り込まれた遊覧地図をみながら、各地への旅行の思い出を語ったり、あるいは計画を立てて楽しんだのであろう。

II 「国民新聞」と「全国温泉十六佳選」の概要

「国民新聞」は、大正初期には、「報知」「東京日日」「東京朝日」「時事新報」と並び、東京の五大新聞の一つといわれていた。しかし、関東大震災による社屋焼失にともなう経営の悪化や「東京日日」と「東京朝日」の販売拡張戦略によって、昭和の初めには5紙のなかで最下位に転落し、「東京日日」と「東京朝日」の半分以下の部数になっていた（有山1992）。創刊者である徳富蘇峰も昭和4年（1929）1月に退社している。したがって、昭和4年12月に開始された「全国温泉十六佳選」は、こうした劣勢を挽回するために企画されたイベントといえるだろう。

それでは、「全国温泉十六佳選」について、

迎歡票投 べらく湯名泉靈

全国温泉十六佳選投票規定

投票開始 昭和五年一月十日夜十二時迄本社を以て締切

投票用紙 本紙刷込みの投票用紙(90枚)を1枚ハガキに貼る

投票ノ切 昭和五年一月十日夜十二時迄本社を以て締切

投票先 東京市京橋區加賀町國民新聞社編集部

投票結果 徳富蘇峰氏により決定す

入選温泉地表彰方法

一、温泉地表彰 十六佳選決定後本紙附録温泉地を發行し紹介す

二、推薦講演會 東京に於て入選温泉地紹介の講演會を開催す

三、入選十六ヶ所に左の賞を贈る

最優位三ヶ所へ 銅製表彰特大碑板

優位當選地へ 銅製表彰大碑板

昭和四年十二月 國民新聞社

わが日本には四百數十の温泉があり、おのづから特色を有してはるますが、泉質、風景、設備、交通その他に於て最も傑出したるものはいづれでもありませんが、本社は全國民の公選により「全国温泉十六佳選投票」を行ひ、古來有名なるものは勿論、未だ世間に知られざる温泉も亦、左記規定第一覽の上一般の公正なる投票を歓迎致します。

図2 「全国温泉十六佳選」の告知
「国民新聞」昭和4年（1929）12月14日

12月14日の紙面に掲載された予告からイベントの概要をみたい(図2)。冒頭に「わが日本には四百数十の温泉があり、おのおの特色を有してはありますが、泉質、風景、設備、交通その他に於て最も傑出してゐるのはいづれでありませうか、本社は全国民の公選により『全国十六佳選投票』を行ひ、古来有名なものは勿論、未だ世間に知られざる霊泉良湯を求めて十六ヶ所の権威を公定し、広く天下に紹介することとしました」とある。有名無名を問わず、得票の順位によって16の温泉を選定することが示されている。

投票規定には、資格：日本に所在する温泉(冷鉱泉は採らず)、投票開始：12月20日、投票締切：昭和5年2月10日、投票用紙：本紙刷り込みの投票用紙(朝刊1票・夕刊2票添付)または官製ハガキに限る、とある。投票用紙を本紙に刷り込むことで、部数の増大をねらっていたことが理解できる。

なお、実際の投票の締め切りは、1月下旬に衆議院の解散があったため、総選挙の影響を避けるために3月5日に延期された。したがって75日間の長期にわたって投票が行われた。また、入選した温泉を紹介するため、附録「温泉号」の発行、推薦講演会の開催、銅製碑板の贈与を行うことで、表彰することが告知されている。

前述の「日本新八景」が東西の有力紙によるイベントとして、全国的な展開をみたのに対して、「全国温泉十六佳選」は、国民新聞社単独の企画であったため、西日本の温泉のほとんどで、このイベントへの積極的な参加はみられない。前掲の表1にあるように、「日本新八景」で上位にあった温泉のなかでは、別府が3万票余を集めているのが目立つ程度である。また、得票結果では500票

表2 「全国温泉十六佳選」得票数上位の温泉

| | 八景 | 十六佳選 | 旅館数 |
|-----------|-----------|-----------|-----|
| 箱根／神奈川 | 187 | 1,204,378 | 34 |
| 花巻／岩手 | 2,120,488 | 867,862 | 4 |
| 下部／山梨 | 3 | 752,587 | 5 |
| 日光湯元／栃木 | 2 | 376,495 | 7 |
| 瀬波／新潟 | | 309,863 | 11 |
| 吉奈／静岡 | 4 | 295,616 | 2 |
| 老神／群馬 | | 289,833 | 4 |
| 小谷／長野 | | 278,356 | 4 |
| 鬼怒川／栃木 | 378 | 273,870 | 5 |
| 伊豆長岡／静岡 | | 271,378 | 11 |
| 玉造／島根 | 1 | 268,182 | 4 |
| 熱海／静岡 | 1,038,287 | 256,372 | 28 |
| 二股ラヂオ／北海道 | | 238,114 | 1 |
| 大室(上牧)／群馬 | | 234,903 | 1 |
| 温海／山形 | 322,354 | 219,171 | 23 |
| 川原湯／群馬 | | 217,789 | 5 |

「東京日日新聞」昭和2年(1927)6月10日紙面、「国民新聞」昭和5年(1930)3月6日紙面より作成

旅館数は鉄道省編(1931)『温泉案内』の記載による

「鬼怒川」は八景投票では「大瀧」と表記

未満の温泉が省略されているので、正確な総数を確かめることができないが、記載されている票数を合計すると766万票となる。

表2に十六佳選に入った温泉の一覧を示した。やはり、玉造以外は、東日本の温泉に偏っていることがわかる。得票が5千票を超えた温泉をみても、関西より西では、4万票の道後と3万票の別府の二つしか入っていない。一方、両者のイベントとも上位にあるのは、花巻・熱海・温海の三つの温泉である。それ以外では、箱根をはじめとして「日本新八景」とのかかわりはあまり認められない。「全国温泉十六佳選」は、得票数だけで順位が決定されるので、箱根のような有名温泉地



図3 「全国温泉十六佳選紹介号」の一面
 「国民新聞」昭和5年(1930)3月20日附録

も選ばれてはいるが、むしろ新興の温泉地、小規模な温泉地にとって、絶好の宣伝の機会と捉えられたのではないだろうか。とはいえ、本紙刷り込みの投票用紙を入手するにしても、官製ハガキを使うにしても、相当の資金力が必要なというまでもない。

講演会は、3月15日午後4時から「温泉大講演会」として国民新聞社講堂で行われた。表彰式には入選した温泉地の16代表、選外の4代表が参列した。この講演会の記録は『温泉日本』にまとめられている（国民新聞社1930）。それには、鉄道大臣江木翼の祝辞、主席論説委員五来欣造の「十六佳選の使命」、林学博士本多静六の「温泉地の発展策」、ツーリスト・ビューロー主事高久甚之助の「温泉と外客誘致」、医学博士藤浪剛一の「温泉は何処か」、医学博士関忠英の「既成温泉の保護法」が収録されている。

附録の発行は、「温泉十六佳選紹介号」として3月20日になされた（図3）。各地の紹介記事は3面にわたり、4面は旅館などの広告となっている。17位から20位までの四つの温泉も「選外優良温泉地」として、20行程度の紹介文が掲載された。

III 加熱する集票活動と得票経過

投票が始まると、前日までの各地の得票結果が朝刊の紙面に連日掲載された。12月20日の朝刊には「投票用紙は昨夕刊（20日付）から刷込んであるので、待ち兼ねた読者諸氏は配達されただけの新聞では満足出来ず各方面から買集めて十票二十票と本社へ直接持参又は速達で送り届けるといふ熱心さ」と、人気沸騰ぶりを伝えている。ちなみに初日には、「在京ファン活躍／初投票二千七百六十余」という見出しのもと、小谷温泉424票、四万温泉289票、花巻温泉215票といった得票結果が記されている。また、「投票問答」として、投票用紙が多数ある場合、手間を省くために最初一枚だけ温泉地名を記入したら他は全部同一のもののみなしていただけるかという問いに対して、最初一枚がちぎれると白票は無効になるので、全部の票に記入して下さいとの回答が掲載されている（昭和4年12月21日付）。このイベントでは、最初から組織票が想定されていたことが理解できよう。

正月にも投票は止むことがなく、昭和5年1月3日の紙面には、元旦にトップに躍り出た花巻温泉が2,000票余を加えて17,789票となり、2,421票を集めて猛然と肉薄した16,671票の伊豆長岡温泉をかわしてリードを守ったことが記されている。初日と比べると、1日の得票数が大きくなっているが、この傾向は、イベントの進行とともに強くなっていった。

1月18日には、「十六佳選の温泉を広く世界に紹介する」として、ジャパン・ツーリスト・ビューローも、後援者として便宜を図ってくれることになったとの記事が掲載された。これは、外国人旅行者の誘致と斡旋を目的として、明治45年（1912）、当時の鉄道院が中心となって発足した組織である（日本交通公社社史編纂室1982、pp.55-60）。同じ紙面には、72,285票で首位にある伊豆長岡温泉の活動も紹介されている。そこには、これまで大和館の主人が青少年団を熱心に指導して活動してきたが、最近にいたって、他の旅館や付近の人もその熱心さに促されて後援会を組織したとあり、次第に地域全体が巻き込まれていくさまがうかがえる。

1月20日の紙面には、関連記事が多く掲載されている。伊豆長岡では、首位からの転落を受けて、さかなや旅館において、大和館、かつらぎ屋、小川屋、橋本屋、共栄館の旅館主などが協議し、一

時に数万票を投じて首位を占めるため、約1万票を送付、宇垣一成陸相を訪問して応援を乞うべく上京する、という動きが伝えられている。また、日光湯元・鬼怒川では、両温泉の後援者が本紙愛読者を訪問して、投票用紙の狩り出し競争を続けているので、これに刺激を受けて、那須でも大々的に活動することになったという記事からは、票集めに奔走する関係者の姿がみえよう。小谷の場合、地元長野県北安曇郡中土村では、緊急村会を招集、「愛郷運動」と名づけて、かつて内務省の特選によりドイツで開催された万国鉱泉博覧会²⁾の出品の誇りを保持すべく投票に関する諸事項を決議、直ちに全県下公共団体が郷県民に向かって後援依頼状を発送、とある。まさに、このイベントへの集票活動が郷土愛をかけた運動となっている。こうした動きは、郷土に暮らすものだけでなく、東京在住の人々にもみられる。在京栃木県人の有力者が集まり、郷土の代表的温泉で、連日の投票でも上位を占めている日光湯元、鬼怒川、塩原、那須、川治の五つの温泉を推挙し、当選を期して猛烈な運動を開始することとなったと伝える動勢は、その典型的な例といえよう（1月23日付）。

当初に設定された締め切りが近くなった1月末には、配達中、新聞刷り込みの投票用紙を切り抜いて配達するものがあるようなので、もしそうしたものがあつたら本社へ知らせるように、また、新聞の注文が殺到しており、間際には応じられないので、早めに申し込むのが得策であるとの注意が掲載されている（1月30日付）。このイベントの効果で、部数拡大のねらいは、多少なりとも達成されたのであろう。

その後2月6日に、衆議院選挙のため、関係者の要望にもとづき投票締め切り日を延長するとのお知らせが掲載された。また、2月9日から衆議院選挙投票日の2月20日まで、投票用紙の刷り込みも



図4 投票最終日の情勢を伝える記事
「国民新聞」昭和5年（1930）3月6日夕刊

中止されている。ただし、投票の受付と得票数の紙面掲載は毎日継続された。

選挙も終わり、「突撃また突撃佳選を目ざす／壮烈なる白兵戦展開」という見出しの付けられた2月28日の紙面には、得票のあり方を「集中射撃」「巨弾」「六インチ級の砲弾」という比喻で表現しており、締め切りの直前に、投票をさらに煽るような記事となっている。とくに最終日に迫ると、多くの紙面を割いて各地の情勢が伝えられた(図4)。事実、最後の一週間には激しい票争いが繰り広げられたのである。

図5には、上位20位までの温泉について、得票数の動きをまとめた。まず、何よりも目立つのは、箱根の最終日における得票の伸びであろう。1日で104万票を上積みして、前日の10位から一挙に1位に躍り出ている。2位となった花巻はずっと上位で安定した得票を重ねており、最終日も52万票を加えたが、箱根には及ばなかった。一方、2月半ばからずっと1位の座を占めていた下部は、最終日に28万票を集めたものの、3位に転落した。

また、連日1万から3万の票を増やしていったのは、大室(現在の上牧)と増富ラジウムである。大室では、締め切り前日に9位まで順位をあげ、最終的には14位で入選した。増富は、2月27日の20位から前日には13位まで順位を上げて入選圏内に入ったが、最終日に21万票余を加えた小谷、17万票近くを加えた玉造、13万票余を加えた川原湯などに逆転されて、結果は17位とわずかに及ばなかった。一方、湯ヶ島の場合、ずっと8位を維持していたが、最終日の得票が7千票しかなく、

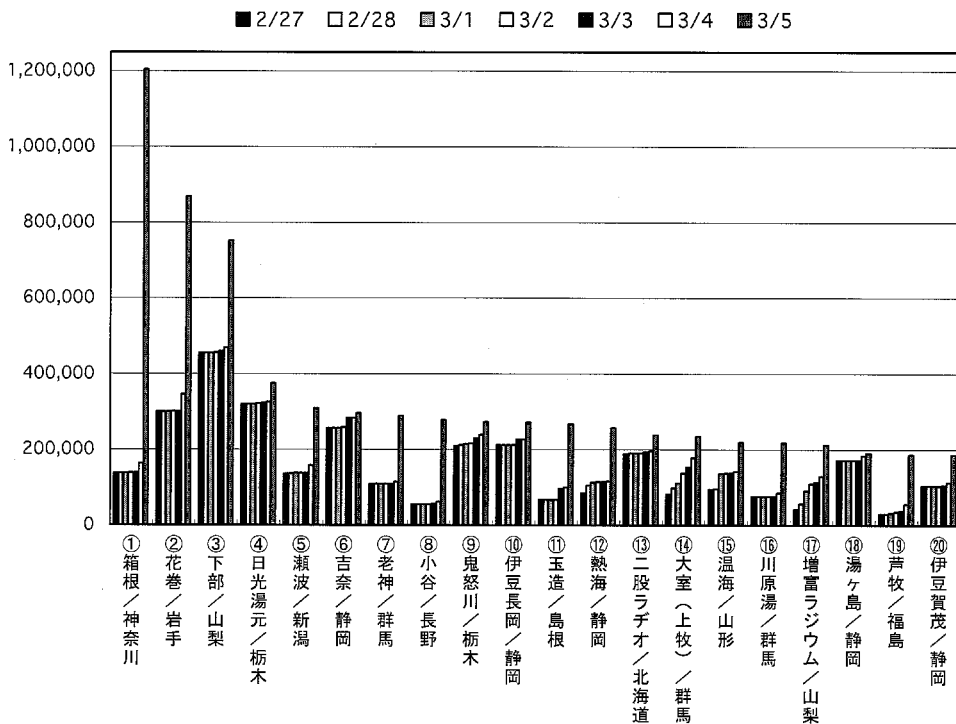


図5 締め切り直前1週間の得票総数の推移

『国民新聞』昭和5年(1930)2月28日～3月6日より作成

順位を大きく下げて圏外に落ちた。このように入選した温泉のいずれもが、最後の1日で何万、何十万もの票を集めたのである。つまり、組織的な集票活動を支える熱意と資金力が当落の鍵となったといえよう。

Ⅳ 温泉地の人々の動き

ここでは、「国民新聞」の記事や関連資料から、温泉地の人々の具体的な活動のあり方を検討し、このイベントがどのように位置づけられるのかを考えていきたい。事例として、箱根、老神、大室の三つの温泉を取り上げる。

箱根の場合、2月半ばまで入選圏内に位置することはなく、当初は静観していたものと思われる。「国民新聞」の紙面には、1月18日の午後に、関係者を集めて協議会を開き、投票に関して話し合ったこと、登山電車の関係で日本電力会社も極力応援することになったと記されている（1月19日付）。また、1月21日の紙面に、箱根は久しく沈黙を守ってきたが、ファンからの投票に刺激されて協議会を開いた結果、いよいよ地元として結束して立つこととなったとある。このとき、箱根の順位は22位で、得票数は6,227票にとどまっていた。すなわち、箱根のような著名な温泉でも、組織的な集票が行われなければ、上位に入れなかったといえる。その後、箱根は票を積み重ね、2月末には10位前後に順位を上げていく。

3月3日の紙面には、「策戦の古強者、正木振興会主事が二日午前ひそかに上京、神田の某旅館に

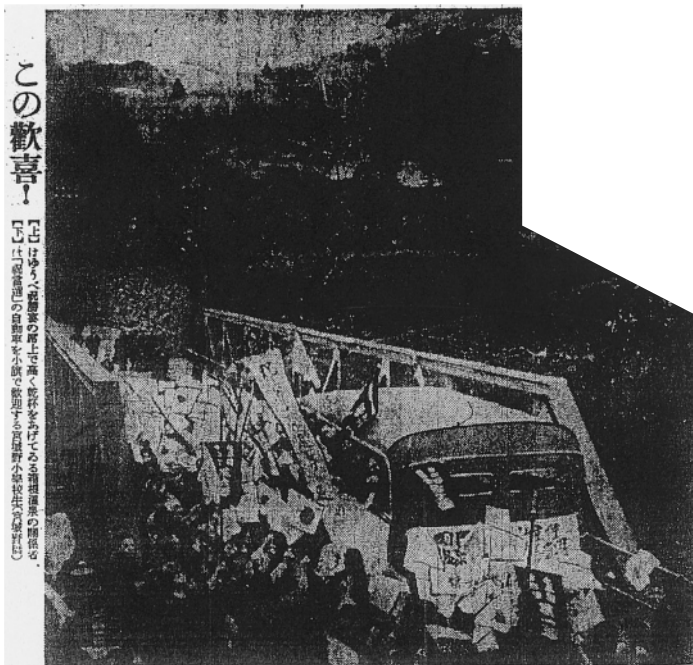


図6 「祝当選」の自動車用小旗で歓迎する宮城野小学校生
「国民新聞」昭和5年（1930）3月7日

本陣を置き在京有志の糾合に目覚ましきまでの活動を見せて来た」とあって、箱根と東京を結びつつ、集票活動を展開していたことがわかる。5日の紙面になると「箱根では我が社の向側に家を借り事務所を設け、連日奮闘の石村振興会主事を始め、柏木其の他数氏と共にゴール眼がけての策戦に活躍に敵状視察に四日夜は殆ど徹夜、その猛運動と秘策は如何なる巨弾となつてブツ放されるか？」と、猛烈な追い上げを予想する記事となっている。

最終日の様子は、途中経過も含めて詳細に報告されている(3

月6日付)。5日午後2時の箱根の順位は13位であったが、午後5時には一挙に8万1千票余を入れて7位に大躍進、その後は他の温泉の追い上げがあって、午後11時には9位となっていた。そこから箱根は18万票を入れて一躍3位に進出、締め切り15分前になって、「三万、五万、十万と一たばにした投票用紙が八九名の人々の手で雨を衝いて本社玄関になだれ込んだ、凄まじい掛け声もろ共机上に山とつまれた票数、驚くなかれ、六十九万五千票」とついに1位に躍進、いよいよあと2分になって「二万、三万の束、箱根だ、箱根だ、箱根が最後の奇襲だ」と最後まで票を積み上げ、そこで12時の締め切りのベルがなった。こうして「大玄関、受付の内外にどつと挙がる歓声、拍手の爆発、此の息づまるやうな劇的シーンの裡に、三ヶ月に亙つて全国に驚異的白熱戦を演じた我が温泉投票は、目出度く最後の幕を閉じたのである。」

箱根1位当選の知らせは、すぐ地元にもたらされ、6日には全山十二湯はもちろん小田原までが歓喜にわき、「軒先に国旗を掲げるやら、青年団在郷軍人さては小学生等が旗行列をするなど文字通り盆と正月と一緒に来た以上の驚喜振り」となった(図6)。これらの記事は、本社より派遣された特派員によるもので、戦争報道のような扱いであった。

「手柄話に打ち寛ぐ当選祝賀会」などの記事では、「殊勲者箱根振興会主事石村幸作」「同理事原重蔵」「小川振興会会長」「箱根登山鉄道副支配人北林賢治郎」「猪飼小田原駅長」「富士自動車の志沢部長」「石村温泉組合長」「清水日電出張所長」といった関係者の役職と名前をみることができる

(3月7日付)。また、7日には、入選の挨拶と宣伝のため、各町村長をはじめ温泉関係者20余名が集合して、強羅から国民新聞社を訪問し、東京の幹線道路を練り回る自動車隊が送り出された(3月8日付)。このように、得票数を競う「全国温泉十六佳選」へのかかわり方は、箱根振興会を中心に、箱根温泉旅館組合、交通機関などの関連企業、町村、住民をあげてのものだったことがわかる。

それでは、「日本新八景」では動かなかった箱根が「全国温泉十六佳選」というイベントに、ここまで力を入れたのはなぜだったのだろうか。それは、箱根における国立公園指定認可運動と関係していたと推察される³⁾。「全国温泉十六佳選」で中心となって活躍した箱根振興会は、「箱根全山ノ興隆ヲ期する」ため、大正15年(1926)に設立され、観光宣伝だけでなく、道路の修繕や植樹・古蹟保存などの保勝事業も担った⁴⁾。その関係者は、国立公園制定の動きを知ると、誘客対策の格好の決め手となると考え、箱根山を国立公園に入れるべく、昭和2年8月に、全山7ヵ町村に湯河原・真鶴2町を加えて、神奈川県を經由して帝国議会への請願を行っている。さらに、昭和4年頃より箱根振興会を中心にして運動は一段と活発化し、昭和5年1月21日には、官民一体となって、神奈川県知事を会長とする「大箱根国立公園協会」が設立されている(箱根温泉旅館協同組合 1986、pp.191-194)。

この協会の設立は、「全国温泉十六佳選」への組織的な取り組みが始まる時期と一致する。このような、全山7ヵ町村、十二湯、行政と民間機関とが一体となる機会と、箱根を内外により広く宣伝する必要性が、大量の投票を後押ししたと考えられる。「国民新聞」にも、「大箱根国立公園協会」が設立されたこと、協会は、国立公園の設定促進を図り、あわせて箱根の名勝を外国へも宣伝するた

め、外人誘致策・遊覧系統の調査研究、資料の収集、図書・雑誌の刊行、講演会・展覧会の開催などを予定していることを伝えている（3月20日付附録）。

他方、群馬県では、「全国温泉十六佳選」の開始にあたり、伊香保・草津・四万・沢渡・川原湯・利根・湯原などの各温泉がそれぞれ参加すべく協議しているとの記事がみえ（12月20日付）、早くからイベントへ関心を示していたことがわかる。1月16日の紙面には「大室、老神もまた躍進を続け」とあって、大室が7位、老神が8位、川原湯も13位と三つの温泉が16位以内につけている。また、川原湯と老神では、今度の催しを宣伝についての絶好の機会となし、入選期成同盟を組織したが、最後の栄冠を期して、いよいよ大馬力をかけることになったと報じられており（1月19日付）、当初から組織的な活動が行われていたことをうかがわせる。

29万票近くを集めて7位で入選した老神温泉は、利根郡に位置し、上越線沼田駅から東へ約16kmの距離にある。ここでは、大正8年（1919）に源泉を管理する老神温泉株式会社が設立されている。当時の状況を見ると、浴客百名を収容できる家屋二棟を設け、宿屋を兼業する、大正8～9年の両年の平均浴客数は、男915人、女317人とあって（内務省衛生局 1923、p.46）、地方の小さな湯治場であったことがわかる。昭和初期には、上之湯元館・下之湯元館に加え、老神館・朝日館・上田館・末広館・山口館などの宿泊施設が整うが、「温泉は其川原の中に湧出てゐるので、湯壺は岩を繰り抜いたり、石で堰いたりして、其上に『バラツク』式の屋根を被せてあるばかり、頗る原始的で素朴……湯壺は三ヵ所あるが皆混浴である」と、箱根や熱海のみを知っている人が啞然とする「百千年の昔」そのままの共同浴場が使用されていた（大日本雄弁会講談社 1930、pp.235-236）。当時の老神温泉は「交通不便のため世人に訪はれること極めて少く靈驗卓効も一部近郊の者の占有する所であ



図7 老神温泉における入選祝賀会の記念写真

桑原美幸氏提供

つた」のである（3月11日付）。

このようなローカルな温泉が、どのようにして上位入選を果たしたのだろうか。1月20日の紙面では、老神は第一回の圧倒的進出で一躍十六佳選の上位を占め、地元ではさらに第二回の奇襲を計画、王座を奪ってあつといわせる意気込みで着々準備とある。その翌日にも、老神温泉は株式会社の経営にあり、関係者は各方面に活動し、3位を目標に近く会社当局者は上京すると伝えている（1月21日付）。

さらに最終日に近づくと、3月3日の紙面には、絶えず陰の人となり力を入れていた同地関係の市会議員はゴールに近づくとみるや、敢然表面に現れ猛烈なる運動を始めたことあって、東京にも有力な後援者がいたことが理解できる。そして、「四日午前八時前橋駅発で桑原社長等十四万票を携へて上京し在京後援会と呼応して東京下谷区中根岸に事務所を設け東京某市会議員の五万票其他を一纏めにして投票し一気に当選を期することゝなつた」という記事には（3月4日付）、地元関係者と東京の後援会が協力しながら、最終日の投票に備える様子が伝えられている。

結局、この大量票が効いて、上位入選にいたったわけである。こうした人々の活動のあり方を推測できる一枚の写真が残されている。図7として、入選祝賀会のときに撮影された記念写真を示した。最前列の左から3番目に座るのが、桑原武都雄・老神温泉株式会社社長で、「全国温泉十六佳選」において中心となって活躍した人物である。

人々の背後には「国民新聞社主催温泉投票寄附者」の札が掲げられている。それらを見ていくと、上段右から、「一、金壹百円也 社長桑原武都雄殿」「一、金壹百円也 老神温泉株式会社重役一同」と続き、上段の32枚の札のなかでは、3円の寄附者が12人と最も多い。下段左の4枚にも1円50銭、75銭の寄附金が記されており、すべてを合計すると、635円25銭となる。この時のハガキの値段は1.5銭であるので、それで換算すれば42,350枚分の寄附金が集まっていたことがわかる。また、



図8 大室温泉旅館の全景

利根郡温泉組合（1930）「群馬県利根郡温泉分布図」より

下段右端の札は人と重なって「一、参」の文字しか判別できないが、2枚目の上部には「一、五千」、3枚目からは「一、壹千五百枚」「一、壹千枚」とみえるので、これらは、寄附をしたハガキの枚数を示していると考えられる。そして、寄附者の氏名の左には、沼田町、前橋市といった地名が付されたものがあるので、地元の人々が中心になりつつも、後援者の援助も欠かすことができなかったことがわかる。

23万票余を集めて14位に入選した大室温泉は、上越線上牧駅から約

200m のところに位置する。今日の上牧温泉のもとになった開発は、大正 15 年（1926）の利根川左岸における深津謙三の掘削に始まる。これは利根温泉と呼ばれ、当初は露天風呂として無料で開放され、翌年に旅館辰巳館が開業された。しかし、昭和 3 年（1928）8 月に、大室乙弥⁵⁾が対岸において掘削し、温泉の利用を始めると、一方の利根温泉の自噴が止まってしまい、紛争が生じた。協議の結果、双方に分湯することとで決着している（古馬牧村史編纂委員会編 1972）。大室温泉は、開業者である大室の名をとったものである。したがって、新興の一軒宿の温泉が入選した事例となる（図 8）。

大室温泉旅館には、温泉付きの離れがつくられており、文人や政治家などの著名人、新婚旅行者などに利用されて賑わったという。鉄道省の『温泉案内』をみても、宿料が比較的高額で、行楽・保養向きの温泉と位置づけられていた。ちなみに昭和 6 年（1931）版では「大室温泉・利根温泉」と併記されているが、昭和 15 年（1940）版では、二つの温泉をあわせて「上牧温泉」となっている（関戸 2004a）。大室温泉旅館は、昭和 15 年頃に東京の貴金属商の手に渡って、経営者が交代しているため⁶⁾、大室乙弥についての詳細は不明である⁷⁾。おそらく、東京の事業家で、昭和 3 年 10 月に上越南線が水上まで延長されることをふまえて、投機的に温泉を開発したものと考えられる。「全国温泉十六佳選」への参加も、格好の宣伝の機会と捉え、個人的な人脈、財力を用いたと推察される。

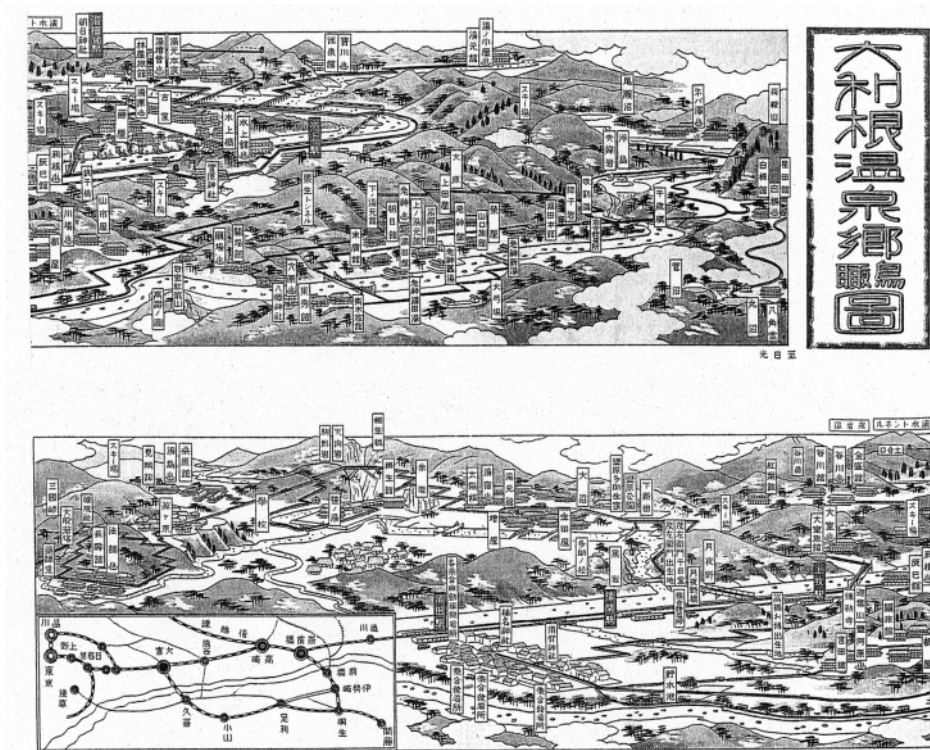


図 9 「大利根温泉郷鳥瞰図」

利根郡温泉組合（1930）「群馬県利根郡温泉分布図」より

これまでのところ、地元との直接的なつながりは確認できていない。

老神温泉や大室温泉が積極的に「全国温泉十六佳選」に加わった背景には、昭和6年（1931）の清水トンネル開通を間近にしていたことが大きいと考えられる。すなわち、上越線の全通を大きな発展の機会と捉えて、イベントを利用したのであろう。利根郡では温泉組合がつくられ、昭和5年7月に「群馬県利根郡温泉分布図」が発行されている。これには、表に温泉の分布図、裏に温泉郷の鳥瞰図と各地の旅館案内が掲載されており、老神温泉と大室温泉の案内文には、「全国十六温泉推薦投票」に当選して、天下にその名を知られたことが記されている。図9には、鳥瞰図を分割して示した。図中には、すでに清水トンネルが記入されており、温泉と旅館だけでなく、乗合自動車の発着所、各地の史跡・名勝やスキー場の位置も示されている。『群馬県統計書』によれば、昭和8年（1933）には、老神温泉に31,081人、上牧温泉に2,522人の延べ宿泊者を数えている。

交通機関の発達によって、旅行が大衆化し、山間の温泉にも都市からの行楽客が訪れるようになった。それとともに、多くの観光地が宣伝を始めて、競争が激しくなりつつあった。各地の温泉も、新旧大小にかかわらず、広告宣伝が必要され、それが白熱した「全国温泉十六佳選」への投票をもたらしたといえよう。

おわりに

「全国温泉十六佳選」に対する鉄道大臣江木翼の祝辞には「本社諸賢能ク温泉カ風景ト共ニ同シク邦家ノ至宝タル所以ヲ全国民ニ自覚セシメ温泉関係ノ諸賢亦各其ノ榮譽ノ大ナルト責任ノ重キトニ顧ミ協心戮力以テ……益々其ノ価値ヲ天下ニ発揮シテ以テ国運ノ伸暢地方ノ繁栄ニ裨補セラルルアランコトヲ」とある（国民新聞社 1930）。ここでは、温泉は、風景とともに国の至宝であると位置づけ、それを国民に自覚させ、温泉関係者も心を合わせて協力し、温泉の価値を発揮して、国運の伸長と地方の繁栄を助け補うことを求めている。

また、国民新聞編集長の細野重勝は、「全国温泉十六佳選」のイベントを、温泉という偉大なる天恵への「国家的、国民的な無自覚と不緊張と怠慢とに対する憤りの爆発であり、刺激を与ふる強烈な投剤であつたのである。国民保健と温泉の治療効果、経済国難と温泉の世界的解放、等々に目覚めなければならぬとする先覚的、愛国的一大国民運動であつたのである」と位置づけている（国民新聞社 1930）。

これらの鉄道大臣、主催者の挨拶には、国家的視点から外国人観光客の誘致、国民の健康増進のために温泉を活用したいとの意図がみえる。このイベントに先立つ昭和4年（1929）12月初めには、温泉に関する研究、知識の普及、温泉地の保護・改善・発展に貢献することを目的に、内務省と鉄道省の所轄になる日本温泉協会が設立されており、この協会もこうした政策にのっとった啓蒙活動を行っていく。

一方、各地の温泉地では、競争が激しくなるなかで、旅館同士が争うのではなく温泉地全体で宣伝活動を展開し、入浴客の誘致に努めようという機運がみられた。すなわち、「全国温泉十六佳選」に

おいては、温泉地の人々は、単なるイベントの観客、情報の消費者であったのではなく、広告装置としてのマスメディアを活用するため積極的にかかわったのである。さらに、地元を出て東京などで生活している人々によって「郷土」の温泉の栄誉をかけた集票活動が行われたことにも留意しておきたい。

このように「全国的に大センセーションを捲起」したイベントではあったが（3月6日付）、今日、各地の市町村史や温泉史などをみてもほとんど記述されていない「忘れられたイベント」になっている。各地の統計をみるかぎり、昭和5年から続く不況の影響で数年間は入浴客の減少したところが多く、直接的な効果は少なかったと考えられる。それゆえ地元で語り継がれることがなかったであろう。

[付記]

本稿の作成には、平成15～16年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(1)「近代日本の民間地図と画像資料の地理学的活用に関する基礎的研究」（代表者：関戸明子）を使用した。資料の収集・聞き取り調査にご協力いただいた方々にお礼申し上げます。

[注]

- 1) 以下では「国民新聞」の朝刊からの引用の場合には日付だけを示し、夕刊の場合にはそれを明記する。
- 2) フランクフルトで明治14年（1881）に開催された。日本からは分析表・地図・浴室模型などが送られ、一等賞を受けたとある（内務省衛生局編 1886）。
- 3) なお「日本新八景」の選定は、進行中の国立公園選定の準備作業にもなったと指摘されている（白幡 1992）。国立公園の理念と候補地については、荒山（1998）を参照のこと。
- 4) これらの事業は、今日の箱根観光の基礎がこの時代に確立されたといっても過言でないと評価されている。昭和4年度の箱根振興会・箱根温泉旅館組合の合同事業報告をみると、新聞広告として「東京日日、東京朝日、報知、都、時事ノ五大新聞」にカットを6回から8回掲載とある。「国民新聞」は発行部数が減少していたためか、広告の対象となっていない（箱根温泉旅館協同組合 1986、pp.164-169）。
- 5) 「国民新聞」には大室正弥とある（昭和5年3月15日付・3月20日付）。
- 6) 昭和14年（1939）の群馬県勝地協会編『群馬県旅館案内』には、「大室温泉旅館」と記載されているが、昭和16年（1941）の『日本温泉大鑑』では「上牧荘」となっているので、この間に経営者の交代があったものと考えられる。
- 7) 『深津大室温泉問題関係書類』（群馬県立文書館所蔵）に綴られた書類によれば、大室乙弥は明治8年（1875）11月生まれで、住所は東京市神田区今川小路となっている。

また「国民新聞」昭和5年3月20日紙面には、「附近は空地多く既に今日では地価も十倍二十倍の騰貴を見てゐる有様で……大室氏は約二万坪の土地を安価に分譲して温泉地の繁栄を図るため旅館を開業する者や別荘地の希望者に便宜を与へると云ふ」とある。ただし、この計画が実現した形跡はみられない。

[参考文献]

- 荒山正彦（1998）「自然の風景地へのまなざし—国立公園の理念と候補地—」（荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』古今書院）128～142頁。
- 荒山正彦（2003）「風景のローカリズム—郷土をつくりあげる運動—」（「郷土」研究会編『郷土—表象と実践—』嵯峨

- 野書院) 90~107 頁。
- 有山輝雄 (1992) 『徳富蘇峰と国民新聞』 吉川弘文館、367 頁。
- 井川充雄編 (1994) 「新聞社事業史年表 (1877~1944 年)」 (津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』 同文館) 333~352 頁。
- 国民新聞編輯局編 (1930) 『温泉日本』 啓成社、69 頁。
- 古馬牧村史編纂委員会編 (1972) 『古馬牧村史』 月夜野町誌編纂委員会、1433 頁。
- 白幡洋三郎 (1992) 「日本八景の誕生—昭和初期の日本人の風景観—」 (古川 彰・大西行雄編『環境イメージ論—人間環境の重層的風景—』 弘文堂) 277~307 頁。
- 関戸明子 (2002) 「鳥瞰図に描かれた伊香保温泉の景観」 えりあぐんま 8、23~40 頁。
- 関戸明子 (2004a) 「北関東における温泉地の近代化—温泉の利用形態と交通手段の変化—」 群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編) 53、201-221 頁。
- 関戸明子 (2004b) 「四万温泉の鳥瞰図を読む」 えりあぐんま 10、5~24 頁。
- 大日本雄弁会講談社編 (1930) 『日本温泉案内 東日本篇』 大日本雄弁会講談社、678 頁。
- 津金澤聰廣編 (1994) 『近代日本のメディア・イベント』 同文館、368 頁。
- 津金澤聰廣・有山輝雄編 (1998) 『戦時期日本のメディア・イベント』 世界思想社、250 頁。
- 鉄道省編 (1931) 『温泉案内』 日本温泉協会、688 頁。
- 鉄道省編 (1940) 『温泉案内』 日本温泉協会、432 頁。
- 内務省衛生局編 (1886) 『日本鉱泉誌 上巻』 (明治後期産業発達史資料 342 巻、龍溪書舎、1997) 482 頁。
- 内務省衛生局編 (1923) 『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』 365 頁。
- 日本温泉協会編 (1941) 『日本温泉大鑑』 博文館、1286+32 頁。
- 日本交通公社社史編纂室編 (1982) 『日本交通公社七十年史』 日本交通公社、993+200 頁。
- 箱根温泉旅館協同組合編 (1986) 『箱根温泉史 七湯から十九湯へ』 ぎょうせい、453 頁。
- 毎日新聞百年史刊行委員会編 (1972) 『毎日新聞百年史: 1872-1972』 毎日新聞、622 頁。
- 三浦直彦 (1932) 「温泉と保健」 温泉 3-5、2~7 頁。
- 山中忠雄編 (1935) 『温泉大鑑』 日本温泉協会、825+60 頁。

